

伯林！ 伯林？

田口 博子

数年前に公開された「セブンイヤーズ イン ティベット」という映画を御記憶でしょうか？ オーストリーの登山家ハインリッヒ・ハラーのチベットでの体験記を脚色したこの映画。内容の波乱万丈さと相俟って、ブラッド・ピットが主人公を演じるとあって、大きな話題となったものである。ほぼ同じくらいの歳月を、筆者も異郷で暮らしてきた。無論、ダライ・ラマとの交友、チベットでの幽閉など、特に劇的な出来事も起こらず、ごくごく散文的な日々をすごしてきたが、その中から幾つかの挿話を描きだしてみたいと思う。体験の幅もさして広くなく、聞き書きの類が紛れ込んでいるので、事実と反する点は何卒、御海容の程をお願い申し上げます。

1809年にフリードリヒ・ヴィルヘルム3世の命で設立されたベルリン大学は、第二次世界大戦後、都市が分割されるに及んで、旧東側に位置することとなり、フンボルト大学と改称された。一方、旧西側には学生のイニシアティブのもと、アメリカの援助を受けて総合大学が新設された。筆者はこのベルリン自由大学の宗教学研究所に留学させていただいた。同研究所ではイスラム学、宗教社会学と宗教哲学を学ぶことが出来る（因みに宗教史学、旧約・新約学は神学部に属している）。尚、指導教官は宗教哲学のクラウス・ハインリッヒ教授である。

博士論文を執筆する条件は、アメリカのように厳密に定められているわけではなく、指導教官が執筆を許可するか否かに掛かっている。筆者の研究計画は当初、「現代における神話の意義」であった。当地の研究所では、「国家社会主義における神話」等の神話研究が柱の一つで、その延長線上での論文執筆を予定し、批評を当然のごとく期待

していたところ、その計画は敢なく却下されてしまった。

外国人留学生からの見聞によれば、テーマ設定の際、担当教官の指導は幾つかのタイプに分かれるらしい。歴史系の学部では、学生の計画に添って、幾つかのテーマを教官側が提示し、生徒はその中から選択をする。この場合、教授が時間的な制約により、自身で研究出来ないテーマが課題とされることが多いと言う。次にドイツ文学・語学専攻では、出身国での作品の受容、あるいは比較、対照研究が要求される。いわずもがな、インド・ヨーロッパ語を母国語としない学生がその対象であり、彼等にはドイツ語の習得が不可能という臆断が、指導側に存在することが見え隠れする。また、テーマの自由選択という場合もあるが、テーマ、展開が教官の意に染むものでなければならぬ。ようよう筆者はこの事例に落ち着くことになった。しかし指導教官を満足させるものを提出するまで、かなりの時間を要してしまった。

執筆の際、一人ではどうしても煮詰まってしまう。討論をする同僚、更に、ぴたりとはまる言葉を探るのが困難な身になれば、事細かく修正してくれる同僚の存在は、論文を完成させるための命綱である。筆者の経験からは、時間を充分に掛けてくれる人が、この任によく耐えるように思われる。この作業、本当に極度の忍耐を要する。精読している知人達の顔が神々しく見えたのは、一度や二度ではない。

また、修正の過程で、今更ながら気付かされたことがある。ネイティブ・スピーカーにご協力を願ったのだが、どの表現までを認容するかという基準、文体の好みは実に千差万別。個人差とともに、そこには年代の差というものが如実にあらわ

れてくる。知人の大半は博士過程に在学中の30代。「文章は短く、かつ主旨は明確に」というのが彼等のモットーである。かつて、野坂昭如は西鶴を筆写したという。長さがほぼ一定、ややもすれば流れに欠く文章を少しでも改良すべく、藁をもつかむ気持で、その故事を実践してみた。ところが、筆者が筆写したテキストは年長者のものばかり。変化をつけるための、「ではないだろうか？」等の反語、接続法の使用は、婉曲すぎるとの理由で、バッサリ切られることが多かったように記憶している。

ただ、それにもまして重要なのは、新説を掲げ、斬新かつ卓抜した意見を主張することである。この新奇さへの志向は、殆ど強迫的とも言えるであろう。この件について、度々、「別の文化圏から来たから、新しい発想をするには有利」との言を承った。日本人であるだけで独創的な考えが展開できるのならば、何も苦労はないのだが…

話変わって、必ずと言って良いほど知人に尋ねられた事柄がある。「何故、ベルリンに来たのか？」(決して、ドイツではない)。当方はしごく真つ当に、「研究所で研究を続けるために」。しかし、相手は納得せず、別の解答を用意しなければならなかった。その答えは後回しにするとして、興味深いことには、質問を發する知人に、生粋のベルリンっ子は皆無であった。この問いは彼等にもかかわることであり、ベルリンという都の特異性にも相通じているように思える。

言わずもがな、かつてベルリンに一種独特な雰囲気を与えていたのは、東西分断という事実であった。壁の崩壊後に渡独した筆者は、残念ながら身を切るような緊張感に接する機会を逸してしまった。それでも、旧東側と旧西側の差異は、依然として残っているように思われる。

都市としてのベルリンの歴史は、同じドイツ語圏でも、ローマ時代の城壁都市に發する由緒正しいウィーンに比して、遥に浅い。しかも、第二次世界大戦の戦火で徹底的に破壊され、『ベルリンの幼年時代』に記されたような風景は、忍ぶよすがもない。旧西側は、郊外にブルーノ・タウトの設計した集合住宅などが保存されているものの、素っ気無い戦後の建物で覆い尽くされているよう

な気がする。他方、旧東側には、再建されたものを含め、それらしい建物が残存している。ことに、目抜き通りであるウンター・デン・リンデンに、過去の栄華の面影が看取れるであろう。国立図書館、フンボルト大学、国立歌劇場、アルテスマuseum…。その中に少なからず、壁面にいまだ弾痕を留めているものがある。「威風堂々とした建物で(勉強できて)、羨ましい限り」とフンボルト大学で哲学を学んでいる知人に尋ねたところ、返ってきたのは意外な答え。「毎日のように通ってれば、厭めしさが眼についてきて」。さすが、建築物にもプロイセンの厳格な精神が宿っているというところか。

当地には3つの総合大学と2つの芸術大学がある。昔から、音に聞こえていたのは、かの地での修学の長さ(筆者も偉そうなことは言えないが)。ドイツの大学は、その殆どが国立である。数年前に、在籍年数が5年(医・歯学部を除く)を越えるとベナルティーが科される、というシステムが導入されるまでは、学生組合の費用以外、授業料を収める必要はなかった。

大学の総合図書館、2つの国立図書館からは、遠距離貸出し、古文書等をマイクロフィルムに転写することも可能。さらに、コンピュータ専用席が設置されており、電源が借りられる。これらの機関は、一般市民でも簡単に利用することができ、申し分の無い研究環境である。しかも、学生証を提示すれば、交通費、コンサート、美術館などの各種文化施設の入場が半額となる。

また、学生と言っても、その年齢は20代から30代だけではない。これはひょっとすると大都会特有の現象かもしれないが、哲学あるいは宗教学の授業には、仕事をリタイアされた年配の方々の姿が見受けられた。

このように書いてくると、学生は極楽の生活を享受しているかのような印象を与えるかもしれないが、将来の生活設計を鑑みると、この浮世離れした生活も、砂上の楼閣の観を呈してくる。わけでも、研究者を目指そうとすれば、その道は険しい。研究機関で正規の職に就くには、博士論文の後、更に教授資格を取得しなければならない。講師、助手職は契約制度であり、助教授、教授のポス

トが増加されることも望み薄。需要に対して、決定的に供給が過剰なのである。50代、60代でも非常勤講師という例は、決して珍しいことではない。まるで、我が身の行く末をみるかのような思いがする。理系の知人が皮肉っぽく「ドイツ名物、教授資格」。曰く、長すぎる徒弟時代が、自由で独創的な研究活動を阻害しているというのだ。学术界での凋落ぶりをこの制度に結び付ける向きもなきにしもあらず。廃止の方向にあるというが、それも近い将来に実現とはいかないようである。

最後に、質問への答えを挙げておきたい。「ク

ラシック音楽ファンにとって、ベルリンのフィルハーモニーは聖地。巡礼のためにベルリンに赴いた」。これで、かなりの笑いを取ることができ、かつ承知して戴けた。さらに表題についてひとこと。『倫敦！倫敦？』とは、長谷川如是閑が大阪朝日新聞社の特派員として渡欧した際の、ロンドン紀行である。そこでは、科学的ということにかこつけた伯林の「挑発的傾向」は、欧州の中で最も進歩していると評価(?)されている。挑発的伯林の魅力を十分に描き切れなかったのは、ひとえに、筆の拙さによるもので、再度お詫び申し上げつつ、この稿を終えたい。